

---

# 何処へでも逝ける画用紙

道造

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

何処へでも逝ける画用紙

### 【Nコード】

N2289BA

### 【作者名】

道造

### 【あらすじ】

KANONのギャグ。      タイトル元ネタは筋肉少女帯の「何処へでも行ける切手」から。

美坂 栞は幸せだった。

日差しが少し暖かい、春の公園のベンチで。

彼女はその手の画用紙に、姉からもらった色鉛筆で絵を描く。

ベンチの右横には、彼女の姉がその様子を笑顔で見つめていて。

左横では、彼女の想い人がぼけーっと空を見上げながら、日向ぼっこをしていた。

その様子を触れ合う肩で感じながら、栞は厚手の紙の上に筆を滑らせる。

「……うん」

今日はいい絵が描けそうです。

彼女は、そう感じていた。

それを伝える手の先は、感無量の感触とともに最後の一笔を落とす。それと同時に、横から声が飛んだ。

「お、出来たか」

少し眠たそうに笑いながら、彼女の思い人が声を出す。

栞は軽く、少し照れくさそうな笑顔を浮かべた後。

その光景を本当に……嬉しそうに眺めている、彼女の姉にも一緒に見るように視線を送り。

この幸せな空間を描いた絵を渡した。

その絵を見て、相沢祐一は呟く。

「これはいいヨグ＝ソトホートだな」

ダークリチュアルだった。

「クトゥルー神話じゃないですよ!!」

公園に、栞の絶叫が響きわたる。

相沢祐一は、栞の思わぬ否定に驚いていた。  
目を見開き、驚愕の表情とともに聞く。

「……暗黒の儀式を描いた絵じゃないのか？」

「真面目な顔でふざけないでください！」

俺は真剣だ。

白い画用紙と、それを塗りつぶす黒一色で塗りとくられた  
この世界を他にどう表現しろと。

「失敬ね……、人の妹をからかわないでよ」

これを産み出してしまった少女の姉が、眩き捨てた。  
原初の粘液として永遠に泡立ち、脈動するその雄々しきヨグ＝ソト  
ホートの絵を俺から奪いとり、眩く。

「これはいいニャルラトテップよ」

「そうか」

ネクロノミコンだ。

「だからなんでクトウルー神話なんですかー!!」

これを産み出した母は、目に軽く涙を浮かべながら訴える。

「つか、栞も栞でよくネタがわかるよな。」

香里もそうだが。

「……違うの？この間貸してあげた本で影響を受けたと思ったのに」

「違いますよ、ていうか、何であんな本持つてるんですか!」

「……栞の病気を治すため、神にもすがる思いだったのよ。」

「あれ、創作神話じゃないですか!」

いや、あえて信じている馬鹿もいるぞ。

「お姉ちゃん!いったい私をどんな人間だと思ってるんですか!」

「可愛い妹よ。病気で死ぬくらいなら、せめて私の手で殺そうかと  
悩んだくらいに」

「そんな怖い告白しないで下さい!」

姉の愛情は、彼女の病気より病的だった。

ぜー、はー、と栞は息をつき少し落ち着いた後、言葉を続ける。

「確かに、私は絵が少々下手かもしれませんが」

「あ、自覚あったんだな」

「駄目よ、まだプライドが残ってるわ。これでは進化は望めないわよ」

香里の分析は厳しい。

そして彼女が進化して、と願うくらいに栞の絵は退化的なシロモノだった。

だがその想いを無視したように、栞はペンをつきつけて、叫ぶ。

「だからこそ、私が成長するために、ちゃんと感想を言って下さい」

「……」

「……」

ボク達は困った表情を浮かべた。

「なんで純朴な子供が悲しんでいるような表情をするんですか！」

「栞、俺な、お前が絵描きに向いているとは思ってないんだ」

「そうね、いつそのこと、小説家を目指さない？クトウル―ネタを書くようなSS書きよりは確実に良い作品が書けるわよ」

ボク達は進路方向の訂正を試みた。

「だから、感想を言って下さいー！」

「そうはいつでも……」

「ねえ」

俺と香里は、長年連れ添った夫婦のように顔を見合わせる。

栞の場合は、下手だから上達する、という物ではない。  
成長、ではなく進化しなければならない。  
そう、もう種としては。

……もう、種としては手遅れなのだ。  
人はどこまでも飛んでいける。

それは神に定められた間違いなきこと。  
しかし、人間がどこまで飛んでいけたとしても

彼女がその絵画という真理に到達することは

決してない。

俺たちは絶望の空気に浸りながら、せめて世界だけは救おうと考える。

「そのうち何か召還しかねないし、止めた方がいいんじゃないのか」  
「そうね、これ以上は美坂家の滅亡にも関わりかねないわ」

「なんで家を持ち出してくるんですか、お姉ちゃん！」

栞の、未だ現状を理解していない絶叫が続く。

俺は彼女がどうやって、ク・リトル・リトルの加護を得たのかを聞き出そうか思案にくれながら、空を仰いだ。

「あ、祐一さん！」

「みまみま」

その背後から、たこ焼きをほうばっている舞と、スポンサーである佐祐理さんが現れる。

相変わらず仲が良さそうで、出来てるんじゃないか、と言いたくなるようなカップルだ。

「あ、こんにちは、先輩」

「あはー、佐祐理でいいですよ。姉妹揃って祐一さんなんかと、何をされてるんですかー？」

香里と佐祐理が行儀良く挨拶を交わす。

祐一さんなんかと、と聞こえたのは幻聴だと自分に言い聞かせながら、俺は傷ついた。

「いえ、ちよつと……香里と栞と一緒に、公園で写生と洒落こんだんですけど」

「あ、そうです先輩。私の絵を見てくださいー！」

「ちよつと、栞……家のハジを晒さないで」

「家制度を持ち出してきてまで批判しないでください、お姉ちゃん！」

栞はただ通りかかっただけの先輩に、自分の絵を見せつけるという拷問行為を開始する。

食い止める香里は、アタシがお嫁に行けなくなったらどうするのよ、相沢くん奪うわよ、とか不吉なことを口走っていた。

俺はその光景を横で見守りつつ、どうやって舞からたこ焼きを奪うかを思案する。

「みまみま……？」



舞はその視線に気づいたのか、じりじりと迎撃姿勢への体重移動を始めていた。

それにしても、どうやってら咀嚼音が疑問系になるのか不思議で仕方ない。

だがそれは別の話として処理され、佐祐理さんの悲劇は続く。

「あはー、いいですよ。こう見えても佐祐理、芸術にはちよつとうるさいですよ」

「あ、ありがとうございます」

佐祐理さんは受け取ってしまった。

そのヨグ「ホートス、もとい、彼女の描いた黒一色の名状しがたいものを。

そして、彼女は絶叫する。

「か、かずやーーーーー!!」

そのリアクションは違う。

そう思いながら、俺は佐祐理さんを取り押さえた。

「か、かずや、かずやーーーーー!!」

「ち、違います。佐祐理さん、かずや君はもう……」

俺は唇を噛みしめながら、彼女から画用紙をはたき飛ばす。同時に、舞が、あつ、という間に剣で絵の中央を貫いた。

「かずや、かずやあ」

だが、佐祐理さんは未だに目を剥いたまま、童女のように言葉の反芻を続ける。

「かずやは、もういないんです！悪魔に、悪魔にだまされないで下さい！」

ぱん。

俺は佐祐理さんの頬を強くはたき、身体をきつく抱きしめる。

「騙されないで下さい……かずやは、いないんです」

彼女は俺の背を爪で搔きむしったが、やがてその動きも止まり。ただ泣き崩れる。

「うああああああ、かずやあああ。ごめんなさい、ごめんなさい」

「……」

俺はかけられる言葉もなく、ただ佐祐理さんを抱き締めたまま立ちつくす。

そして、腕の佐祐理さんは顔をあげ、その泣き顔を

「すみません、取り乱しまして」

「復活早っ！」

無茶苦茶いつもの笑顔だった。

「……だって、もう私には祐一さんがいますから」

何故か顔を赤らめながら、俺の身体をぎゅっと抱き締める。

さつき、祐一さんなんかと、とか言ってた癖に。  
あと、舞がたこやきの爪楊枝で俺の首をさつきから刺してて、すごい痛い。

「……あ、あー！私の絵が！」

後ろで呆然としていた栞が再び動き始め、もずのはやにえのように舞の剣に刺さった絵を指さす。

「……よかった」

「よくありませんよ！」

安心してまくっている香里と比べて、栞はおかんむりだ。

舞は佐祐理さんを傷つけたそれを、そのまま八つ裂きにしたいようだった。

が、それより栞の表情が怖かったらしく、画用紙を地面にあて、端を踏みにじりながら剣をひきぬく。

余計にボロボロになったが、栞以外に誰も気にしない。

「……これは」

そうして画用紙を拾い上げた舞は、画用紙に描かれたものを見て、短く告げた。

「魔物」

「何がですかああああああ」

栞、今日はよく叫ぶなあ。

「なあ舞、それヨグソトホートだよな」

「違うわよ、ニャルラトテップよ」

俺と香里は、ここぞとばかりに同意見者を募る。

「違う。これは名前はない故に魔物と呼ばれる存在。それ以外にありえなかった、魔物という存在」

「そうか……」

「私たちが間違っていたようね」

「何でそこまで言われなくちゃいけないんですかああー」

栞、声帯切れるぞ。

ただでさえ病み上がりなのに。

「あははー、舞は詩人さんですねー。ところで、それってかずや復活の材料になりますか」

「……あるいは。しかし、その結果は決して幸せではなくて」

「あああ、話を聞いて下さいっ!」

栞は無視されて寂しかったのか、腕をぶんぶん振り回して注目を集める。

まあ栞……あんなに元気になって、と香里はどこか幸せそうに、涙目で栞を見つめていた。

いい姉妹だ。

その妹は、今度こそ泣きそうな顔で叫ぶ。

「いいですか、私が書いたのは犬です!」

空気が止まった。

「はっ！」

一番早く、息を吹き返したのは俺だった。  
未だ心臓が脈打っていることに、俺はク・リトル・リトルに感謝した。

最初に生き返った義務として、叫ぶ。

「はい、注目——！」

ぱん、と手を叩いた。

それと同時に、香里と佐祐理さんと舞が現世に帰還する。  
よかった、全員無事だ。

「栞が言うには、コレは犬らしき物だと言う！」  
「犬らしき物じゃありません、犬ですよ！」

この魔物を生み出した母が、魔物を指しつつ言った。

「犬？」

「犬さん？」

「犬……なんですか」

え、本気。

嘘だ。

でまかせだ。

何でそんな事を言うの。

そんないくつもの疑念を浮かべた表情で、三人は栞を心配した。

「心配そうな顔で見つめないで下さいっ！」

心配そうな、じゃない。

心配なんだ、栞。

「……みんな、聞いてちょうだい。栞は、最近まで病に冒されていたの」

香里の沈痛な弁解とともに、心配の視線は同情へと変わる。

「どういう意味ですかーっ！お姉ちゃん」

「わかってる、栞。まだお前は社会に慣れていないんだ」

「何がっ！いったい、何の話なんですか、祐一さん？」

こくこく、と佐祐理さんと舞は首を上下に振った。

全てわかっている、何も言わないでいい。

そんな優しい雰囲気、二人は漂わせていた。

「あの……頑張って下さいね」

「このことは……誰にも言わない」

「何々ですか！何でそんな優しい目なんですかっ！」

たっ。

駆け足で、二人は去っていった。

その方角にある夕焼けの日差しは、やけに目にまぶしかった。

「……よかった。これで、美坂家は救われるわ」

「あの二人は信用できる。今回の件は誰にも言わない」

「だから、何でそんな世間体拙いことのように言っんですかー！」

俺は涙目の香里の背中をさすりながら、泣き喚く栞を猫つかみで掴んだ。

きつと、今日は家族会議だろう。

そんな事を考えながら、俺は絶対にそれに参加しないで、と心に堅く誓った。

俺の腕を掴む、香里のもの凄い握力を感じながら。

その相沢祐一の足下で、一枚の踏みにじられた画用紙が風で遠くに飛んでいく。

その後、破れ捨てられた一枚の絵は、公園に住むホームレスに拾われた。

彼はその後宗教団体を興し、昔拾った絵を偶像として崇めながら恵まれない環境や病気の子供達のための社会福祉に貢献し、生涯を終えたという。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2289ba/>

---

何処へでも逝ける画用紙

2012年1月5日20時48分発行